

# ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

すりこぎかくしの雪  
弘法大師の優しさ  
独鈷の滝の大蛇  
弘法大師が大蛇を封じる



伝説 すりこぎかくしの雪  
弘法大師の優しさ  
独鈷の滝の大蛇  
弘法大師が大蛇を封じる

紀行 心優しいお大師様  
・空海と弘法伝説  
・すりこぎかくしの世界  
・独鈷の滝と岩瀧寺  
・水分かれ

関連情報 用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## すりこぎかくしの雪 弘法大師の優しさ

弘法大師（こうぼうだいし）は、真言宗（しんごんしゅう）を開いたお坊さんです。中国で勉強し、学問にすぐれ、たいへん徳の高いお坊さんだったので、多くの人に尊敬され、全国各地にたくさんの伝説が残されています。

但馬（たじま）のお話です。

冷たいみぞれが降り始めた、冬の夕暮れのことでした。ひとりのお坊さんがきたない小さな家の入り口に立って、一晩とめてほしいとたのみました。

お坊さんはとてもつかれていました。手も足も冷たくなって、痛いほどです。お腹もへって、もう一步も歩けません。けれどもどの家も、みすばらしいお坊さんを泊めてくれません。そしてとうとう最後の、いちばん小さくてきたない家の前に立っていたのです。

「まあまあ、寒かったことだらあなあ。早（はよ）うあがって火にあたんなはれ。何にもないけど、ええ火にやあとたくけえ、ようぬくもってくんなはれ。」

出てきたおばあさんは、親切にこう言ってくれました。

火にあたりながら、お坊さんが見回してみると、家の中には何もありません。とても貧しい暮らしなのがよくわかりました。

お腹がすいたお坊さんをとめてあげようと思ったものの、食べさせてあげるものもなく、おばあさんは途方（とほう）にくれました。どうしたらよいか迷っていましたが、やがて心を決めたように、立ち上がって家から出てゆきました。

体をふらふらさせながら歩く姿を見ると、おばあさんの片方の足は、何と足首から先がなくて、すりこぎのようになっています。

おばあさんはけんめいに歩いて、となりの家ののき先までやってきました。さきほど、お坊さんがとめてほしいと頼んだとき、追いはらうようにしてことわった家です。のきの下には、稲の束がかかっていた。おばあさんはしばらく家の中のようすをうかがっていましたが、やがて手を伸ばして稲をひと束取ると、転がりそうになりながら自分の家にもどってきました。

おばあさんが歩いた後には、すりこぎでついたような足跡がはっきりと残っています。おばあさんが稲をとったことは、すぐにわかってしまうでしょう。

お坊さんがお経を読んでいる声を聞きながら、おばあさんはおかゆをたいて、お坊さんにすすめました。外では、みぞれが雪に変わっていました。雪はやがてお婆さんの足跡をうめ、すっかりわからなくなるほどに積もってゆきました。

この旅のお坊さんは、弘法大師だったのです。弘法大師は、仏様においのりしておばあさんの足跡を雪でかくしてくれたのでした。旧暦（きゅうれき）の11月23日の「寒大師（かんだいし）」の日には、毎年必ず雪が降るそうです。この日の雪のことを、今も「すりこぎかくし」と呼んでいます。

## 独鈷の滝の大蛇

### 弘法大師が大蛇を封じる

丹波（たんば）の氷上（ひかみ）というところには、こんなお話が伝わっています。

香良（こうら）の村のおくにある滝に、恐ろしい大蛇（だいじゃ）が住んでいました。滝のまわりは木がうっそうとしげって、昼間でもうす暗くて気味悪いところです。けれども村の人たちが山仕事に行くには、この滝の横を通らなくてはなりませんでした。

いつ大蛇が現れるかわかりませんから、村の人たちはいつもこわい思いをしていました。

「ほんまにこわいのう。いつ大蛇がおそってくるかもしれんで、山へ行くのはいやじゃ。」

「こないだも、山でふっと上を見たら、ひとかかえくらいある大蛇が、松の木に巻きついて赤い舌をぺろぺろさせとったで。思い出してもこわいわ。」

「ほんまにこわいのう。」

昨日はだれかが丸飲みにされたとか、このあいだはだれかが追いかけられたとか、恐ろしい話は広まってゆくいっぽうでした。

ある夜、京の都にいた弘法大師（こうぼうだいし）の夢に、住吉大明神があらわれて、「おまえの力で村の人たちを救ってあげなさい」と告げられました。

そこで大師はさっそく、丹波へとやってきました。

滝つぼへ行ってみると、大明神のお告げの通り、ものすごい大蛇が頭を出して大師をにらみつけ、今にもひと飲みにしようとしています。

「おう、これは村の人もさぞ恐ろしかっただろう。」

弘法大師は滝つぼの前に座ると、さっそくお経をととなえて、一心に仏様にいのり始めました。さすがの大蛇も、お経の力のために、大師におそいかかることができません。三日三晩、大師のとなえるお経が香良の村までひびき、村人たちもこれを聞いて、いつしか一緒においのりを始めるのでした。

四日目の朝、大師は持っていた独鈷（どっこ）を「えいっ」とばかりに、大蛇めがけて投げつけました。すると、人を丸飲みにするほどの大蛇が、みるみるうちに小さくなり、滝つぼの中へ消えていったということです。

その後弘法大師は、天皇にお願いして、滝の近くに岩瀧寺（がんにゅうじ）というお寺を建てました。そして、大蛇を退治できたお礼に、石で不動様の像を作り、祭りました。小さくなった蛇の頭は、お寺の下に池を掘って埋め、そのわきにお堂を建てたそうです。

今でもこのお堂と池は残っていて、「池の中へ石を投げこむと雨が降る」と言い伝えられています。

## 紀行「心優しいお大師様」

### 空海と弘法伝説

空海(くわい)は、平安時代の僧である。唐(とう)へ留学した後、京都の高尾山寺(たかおさんじ)へ入って真言宗を広めるとともに、高野山に金剛峰寺(こんごうぶじ)を建設。さらには東寺(とうじ)を下賜されて、真言宗の根本道場としている。835年に62歳で死去し、921年に醍醐天皇(だいごてんのう)から「弘法大師(こうぼうだいし)」の諡号(しごう)が贈られた。

空海は、単なる「唐へ留学したインテリ」だったわけではない。香川県にある日本最大の農業用ため池、満濃池(まんのういけ)を改修する際には、その責任者として当時の最新技術を駆使した工事を成功させていることを見ても、彼が唐で学んだことの幅広さがわかる。そういう活躍が、いつの間にか人々の間で、伝説を産む元になったのだろうか。

伝説の中には、「空海」という名は出てこない。出てくるのはすべて弘法大師である。死後90年近く経って贈られた名の方が、生前の名よりもはるかに広く語られ、人々の間に定着したのは、どうしてなのだろう。弘法伝説を読むたびに、疑問が浮かぶ。もしかすると民衆にとっては、生きた人としての空海よりも、霊としての弘法大師こそ、信じ求めるものだったのだろうか。

### すりこぎかくしの世界

但馬(たじま)は雪深い土地である。一晩に何十センチも積もることも、珍しくはない。雪深い土地であればなおのこと、暮らしには厳しいものがあつたろう。「すりこぎかくし」は、そんな世界に住む貧しい、生まじめな老女の小さな悪事 自分ではなく他人のために働いた行為 を、弘法大師がそっと隠してやるという物語である。お大師様は、貧しくてもまじめな者の味方をしてくれる。そんな素朴な思いが込められた物語なのだ。

但馬には、豊岡市(とよおかし)の東楽寺(とうらくじ)、養父市(やぶし)の日光院(にっこういん)、養父市別宮(べっくう)の大カツラなど、空海にゆかりの場所がいくつかある。しかし伝説が伝わる新温泉町(しんおんせんちょう)内では、「空海開基」の寺をみつけることができなかった。ここでは空海は、文字通り伝説上の「弘法大師」として生きているのだろうか。古いお寺をめぐって、そんなことを考えた。

## ひょうご伝説紀行

### 「すりこぎかくしの雪」「独鈷の滝の大蛇」

#### 相応峰寺

相応峰寺（そうおうぶじ）は、岸田川（きしだがわ）が日本海に注ぐ河口のすぐ東、浜坂町清富（はまさかちょうきよどめ）の観音山（かんのんざん）にある天台宗の寺である。岸田川に沿った心地よい道を海へとたどり、河口の手前で川を東へ渡ると、左手に見える小高い山が観音山。そのすそに、寺の里坊が見える。

この寺は、奈良時代に行基（ぎょうき）が開いたとされる。弘法大師と同じように民衆に慕われ、菩薩（ぼさつ）と呼ばれた行基は、但馬でも同じように人々を救ったのだろう。坊のわきには、眼病や流行病に効くという金水・銀水がわく。

里坊のわきから、山道を登る。道に沿って石仏が並び、登る人を頂上へと導いてくれる。息を切らせながら20分も登ったろうか。ようやく鐘樓の姿が見え、その奥に本堂の円通殿がある。高い杉木立に囲まれた、静かな場所だ。

本堂の裏手からさらに登ると、観音山の山頂である。芝生広場になっている山頂からは、日本海の雄大な景色が180度広がる。はるかに下の岩場に砕ける波頭が見えるが、波音は聞こえない。遠くかすむ海にしばし見とれて、足の疲れも忘れてしまった。

山頂のすぐ下には、高いポールが立つ。毎年ここに大きな鯉のぼりが泳ぐそうなので、いつか是非見てみたいと思う。

#### 正福寺

湯村温泉のまん中にあるのが、平安時代前期、湯村温泉（ゆむらおんせん）を発見した慈覚大師円仁（じかくだいしえんにん）が開いた正福寺（しょうふくじ）である。国道9号線から離れて春来川（はるきがわ）を渡り、川に沿った細い道を温泉の中心街へ向かうと、その途中に本堂への長い階段があった。



正福寺の境内



本堂



岸田川から見た観音山



相応峰寺



相応峰寺



里坊の石仏



本堂(観音山上)



山上からの眺望



山道の石仏



本堂そばの石像



参道



説明板

日の出直前の時間だというのに、もうゆかた姿の人が道を歩き、足湯に浸っている人もいる。川沿いに上がる湯気が、いかにも温泉場らしい。

階段の上に、堂々とした門がそびえる。本尊は県の文化財に指定されている、平安時代後期の木造不動明王像で、この像は21年ごとに開帳される秘仏である。前回の公開は2004年だったそうだから、次は2025年になるのだろうか。

秘仏は滅多に見ることはかなわないが、境内のまん中にある桜は、毎年花を見せてくれる。この木は、ヤマザクラとキンキマメザクラが自然交雑して生まれたもので、植物学者牧野富太郎（まきのとみたろう）によって発見、命名されたという歴史をもつ。現在のところ兵庫県固有のもののように、正福寺桜の名で親しまれ、町の天然記念物にも指定されている。

## 独鈷の滝と岩瀧寺



独鈷の滝



独鈷の滝

丹波にも弘法大師の伝説がある。その地のひとつ、氷上町（ひかみちょう）の香良（こうら）を訪ねた。加古川（かこがわ）が佐治川（さじがわ）と名を変える上流部である。

丹波山地の広い谷筋にできあがった、緩やかな斜面に沿って香良の村がある。伝説が伝わる独鈷の滝は、その谷奥、山腹に露頭した荒々しい岩盤を流れ落ちている。道が山すそにかかると周囲は一気に森へと変わり、車から降りると、湿気を含んだ空気が体を包む。独特の、森の香気を含んだ空気である。

そこから山道を詰めてゆくと、間もなく高く切り立つ岩盤が目に入る。ところが激しい水音は聞こえているのに、滝は見えない。不思議に思いながら滝壺の前まで小径を行くと、ようやく、岩の壁の裏側を、えぐるように流れ落ちる滝を目にすることができた。

高くはないけれど、美しい滝だ。流れ落ちる水は、上の方では日の光を浴び、淡い木陰へと落ちてゆく。滝壺の手前にはモミジの木が何本か伸びていて、紅葉の時は、きっと素晴らしいコントラストを見せてくれるに違いない。人を呑むほどの大蛇がいたにしてはつましい滝壺からは、清らかな水が流れ出していた。



岩瀧寺(本堂)



山門

滝のすぐ下手には、岩瀧寺（がんりゅうじ）がある。

岩瀧寺は、平安時代の初め頃、嵯峨天皇（さがてんのう）が空海に命じて建立した寺だと伝えられている。弘仁年間（809～823）のことだということから、空海が40代のころだろうか。七堂伽藍（しちどうがらん）を備えた大寺だったというが、戦国時代の兵火によって焼失して、かつての伽藍は残っていない。現在の堂は、近世に再建されたものとのことである。



龍

小さいながら風格がある門や、檜皮葺（ひわだぶ）きの本堂が、背後の山や高い木々と相まって、落ち着いた、しかし明るい雰囲気を作っている。滝から境内は紅葉の名所とのことだし、寺の案内にある雪景色は、山水画のような美しさであるが、まだ見る機会がない。

こんな美しい場所に、どうして恐ろしい大蛇の伝説ができ、それが弘法大師と結びついたのだろうか。あるいはそれは、時に人知が及ばないほど猛り狂う水を治めたいという願いが生んだ伝説なのだろうか。

## 水分かれ



水分かれ

氷上には、もうひとつ水に関わる大切な場所がある。それが水分かれである。加古川は、氷上町に入ると佐治川と名を変え、ちょうどそこで一本の支流が分岐し、東へと向かう。これが高谷川（たかたにがわ）である。高谷川は、まもなく氷上町石生（いそう）の谷ふところへと入ってゆくが、この谷へはもう一本の川 黒井川（くろいがわ）も源をもっている。

黒井川は高谷川とは反対に、谷を下ると東へ流れ、由良川上流部の竹田川に合流する。つまりこの谷から流れ出た水は、加古川と由良川（ゆらがわ）、瀬戸内海と日本海に流れる二つの川へと注ぐのである。本州の中で最も低高度の中央分水界であるこの地は、古くから「水分かれ（みわかれ）」と呼ばれた。

水分かれの重要性は、単に「最も低い分水界」という地形学的なものだけではない。瀬戸内側から日本海側へと抜けようとする、兵庫県の場合必ず中国山地の峠を越えなくてはならないが、水分かれの谷を経由して加古川から由良川へ抜ける道は、峠越えの必要がないのである。そのため古代から、このルートを通して人と物の交流がおこなわれていたと考えられているのだ。

最近水分かれのあたりは、ずいぶんきれいに整備されて公園となっている。川もコンクリートや石垣で固められて、日本海と瀬戸内海への分岐部分も人工的な流路になってしまった。周辺の桜並木は美しいだろうけれど、これではホタルも住めないだろうと少し残念である。



左瀬戸内海、右日本海・・・

## 用語解説

### 【相応峰寺】そうおうぶじ

新温泉町に所在する天台宗の寺院。観世音山と号する。浜坂湾に突き出た岬にある、観音山山頂に本堂、そのふもとに里坊がある。行基が737年に開いたとされる。本堂には平安時代前期の十一面観音立像があり、国重要文化財に指定されている。

### 【正福寺】しょうふくじ

新温泉町に所在する天台宗の寺院。天竜山と号する。848年に、慈覚大師が湯村温泉を開発した際に創建したと伝えられ、湯村温泉の荒湯を見下ろす高台に建つ。本尊は、平安後期の作とされる不動明王立像で、県指定文化財。境内に、正福寺桜と呼ばれる桜があり、県天然記念物に指定されている。

### 【正福寺桜】しょうふくじざくら

キンキマメザクラとヤマザクラの自然交配種とされる八重桜で、兵庫県の固有種といわれている。植物学者牧野富太郎により、「*Prunus tajimaensis*」の学名が与えられている。がく片10枚、1つの花に雌しべが2～4本ある珍しい桜で、花と赤い葉が同時に育つため、満開のころは桜の木が真っ赤に見えるという。

### 【岩瀧寺】がなりゅうじ

丹波市氷上町にある真言宗の寺院。寺伝によれば、弘仁年間（809～823）に、嵯峨天皇が霊夢にもとづいて、空海をこの地に派し、伽藍（がらん）を整備させたという。16世紀の後半に、兵火によって全山を焼失し、その後領主の別所重治により再興。18世紀以降も、九鬼氏（くきし）らによって堂宇の再興がおこなわれたという。

寺の背後をなす山地には、独鈷の滝、不二の滝と呼ばれる滝があり、特に紅葉の名所として知られる。

### 【独鈷】どっこ

とっこ、独鈷杵（とっこしょ）ともいう。

密教で用いられる法具、金剛杵（こんごうしょ）の一種。鉄製または銅製で、両端がとがった短い棒状のもの。煩惱をうち砕き、人間本来の仏性をひきだす道具とされている。

### 【由良川】ゆらがわ

兵庫県・京都府北部を流れる河川。丹波高地の三国岳（標高959m）に発し、北流して、舞鶴市と宮津市の境界をなしつつ若狭湾に注ぐ。兵庫県丹波市からの支流である黒井川は、同市氷上町石生に発するが、加古川水系の高谷川もここから流下する。両川の分水嶺（ぶんすいれい）は標高94.5mで、太平洋側と日本海側を分かつ本州中央分水界では最も標高が低く、古来水分れ（みわかれ）と呼ばれる。宮津市由良は、かつては由良川水運の港として栄えた。

### 【分水界・分水嶺】ぶんすいかい・ぶんすいれい

雨が、二つ以上の水系へ分かれて流れる境界。通常は山の稜線（りょうせん）が分水界となる。

## 【醍醐天皇】だいてんのう

第60代の天皇（885～930）。在位は897～930年。藤原時平を左大臣に、菅原道真を右大臣に任じ、天皇親政による積極的政治の運営をして、律令政治が最後の光彩を放つ「延喜の治」を創出した。道真の失脚後は藤原氏の勢力が拡大した。

## 【空海】くうかい

平安時代前期の僧（774～835）。弘法大師（こうぼうだいし）の諡号（しごう）で知られる、真言宗の開祖。最澄（伝教大師）とともに、奈良仏教から平安仏教への、転換点に位置する。また書道家としても知られ、嵯峨天皇（さがてんのう）・橘逸勢（たちばなのはやなり）とともに「三筆」と呼ばれる。

空海は、讃岐国の豪族佐伯氏の子として、現在の香川県善通寺市に生まれた。15歳で論語、史伝等を学び、18歳で京の大学に入った。20歳ごろから山林での修行に入り、24歳で儒教・道教・仏教の比較思想論でもある『三教指帰（さんきょうしいき）』を著した。

延暦23（804）年、遣唐使留学僧として唐に渡る。804年～806年にかけて、長安の醴泉寺（れいせんじ）、青龍寺などで学んだほか、越州にも滞在して土木技術、薬学などを学んだ。806年に帰国。本来の留学期間20年に対し、実際の在唐はわずか2年であった。

帰国後、東寺（教王護国寺）を賜って真言宗の道場とし、816年には高野山に金剛峰寺を開いて真言宗の興隆につとめた。また私立学校として、綜芸種智院（しゅげいしゅちいん）を開設した。

弘仁12（821）年、満濃池（まんのういけ、香川県にある日本最大の農業用ため池）の改修を指揮して、当時の最新工法を駆使した工事を成功に導いたとされる。

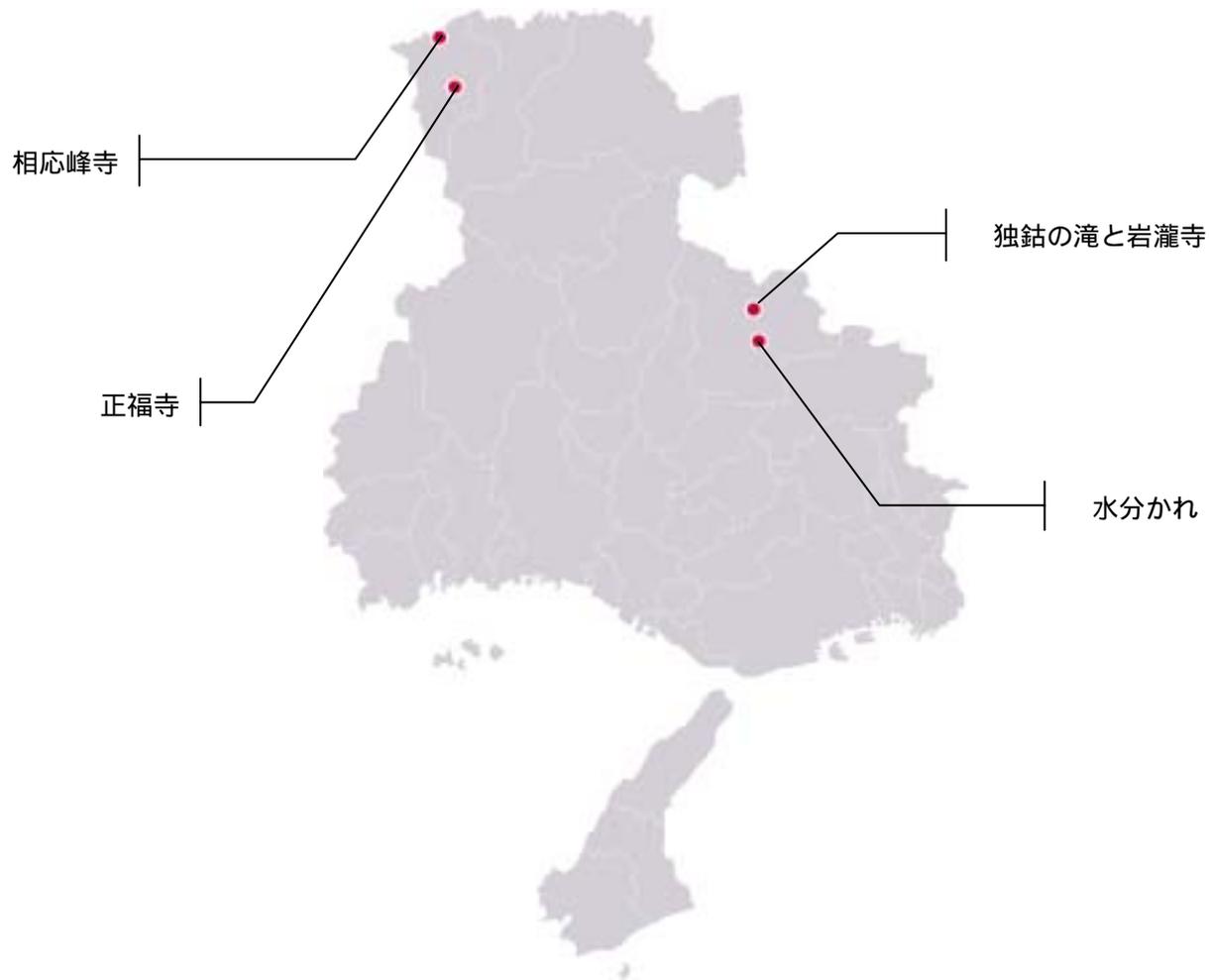
承和2（835）年、高野山で入定（にゅうじょう）。なお真言宗では、空海の入定は死ではなく永遠の禅定に入つたものとしている。

「弘法大師」の諡号は、延喜21（921）年醍醐天皇より贈られたものである。従って、北海道を除く全国に5000以上あるという弘法伝説のほとんどは、空海の歴史的事跡とは関係がない。その成立には、中世に全国を勧進してまわった遊行僧である、高野聖（こうやひじり）の活動も関連しているとされるが、一方で、仏教のみにとどまらない空海の幅広い活動と、それに対する民衆の崇敬が、伝説形成の底辺にあることも確かであろう。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	郷土の民話但馬篇	1972	郷土の民話但馬地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
	兵庫のふるさと散歩5・丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	丹波のむかしばなし第1集	1998	丹波のむかしばなし編集委員会	(財)丹波の森協会
	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本昔話通観第16巻兵庫	1978	稲田浩二・小沢俊夫編	同朋社
	兵庫のふるさと散歩5・丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸の伝説散歩 兵庫ふるさと散歩11	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	日本伝説大系第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
	新版神戸の伝説	1998	田辺真人	神戸新聞総合出版センター
その他	岩瀧寺 参拝者用資料	不詳	岩瀧寺	岩瀧寺

## 所在地リスト



相応峰寺	兵庫県新温泉町清富
正福寺	新温泉町湯174
独鈷の滝と岩瀧寺	丹波市氷上町香良613-4
水分かれ	丹波市氷上町石生

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

## ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日